

# 父の心配

嶋津 治夫

広津和郎の初期の作品に〈崖〉という七、八枚の掌編がある。それは、知多半島の師崎もろさきに療養している父（広津柳浪）を見舞いに行った時の小景であるのだが、そこに現われる父親の息子に対する心配の仕方というものが、何とも言いようのない、胸のつまるような気分僕をさせる。

師崎の岬の崖のあたりを散策する「私」、それを病院の方から見ている「父」、やがて私は父が病室の縁側から外に出て、海岸の砂地から手を振るのを見た。私も父に向けて手を振る。そして私は岬の崖にある岩をステッキで叩いたりしていると、岩は意外にもポロリポロリと崩れた。私はしゃがんでその岩の様子を調べる。その時、「おい、どうかしたんじゃないか」という声がして、父が心配そうに立っていた。

父は遠くから私が崖の縁ふちに立っているのを見て、もしめまいでもしたら大変だと思って急いでやってきたのだった。よくめまいをおこす息子だった。父は、その心配と、岩場を急ぎ足で歩いたことからまた容態を悪くした。父は咳を

するたびに、血のまじった痰を出すようになった。

僕が、広津和郎の父の姿に何ともやりきれない気持ちを抱くのは、僕の父が同じように息子に対してひどく心配性だったからだ。

僕は父が五十三歳の時の子供だった。六歳年上の姉がいたが、これは母との間の子ではなかった。姉は戦時中、父が東京の早稲田鶴巻町で食堂をやっていた頃手伝いに来ていた人との間にできた子で、母との間に子がなかった父はその子を自分の籍に入れたのだった。そして戦争が終わり、もう子供はできないと思っていた四十四歳の母に男の子が生まれた。父は、もしかしたら、この僕が生れた時の気分からずっと立ち直れなかったのではないかと思うのだ。

それはそれとして、昭和三十年、長年東京に住みつづけてきた父と母は、江戸川を渡って千葉の市川へと引越していった。六十になろうとしていた父が、母の遠縁の人の経営するレストランのコックとしての職についたのも、遅くできた息子のことを思えばであったのかも知れない。

僕はその時小学一年で、二学期から市川の小学校に転校した。はじめのうちは、僕は早目に勤めに出ていく父と一緒に学校への道を歩いた。それは大きなお寺の境内をぬけていく道だった。僕は白髪頭しらがあたまの父のうしろを歩いていった。父と僕は何の話もしなかった。小学校の校門までの登り坂、

そこをのぼって僕が校庭の中にはいつていくのを、父は校門のところですつと見ていた。そんな父を、早く行ってしまえばいいのに、と思ったことは本当だ。父は、僕の姿が校舎の中に消えたのを確かめてから、遠まわりの格好で駅前のレストランに向かうのだった。

僕が中学生になった夏、父は今度はとなりの船橋へ引越して、そこで小さなラーメン屋をはじめた。父はもう六十を半分以上過ぎていたが、勤め人ではもう給料があがらなかつたからだ。

父がラーメン屋を出したところは、船橋でも最も場末の地域であった。店のすぐ前には赤いネオンのキャバレーがあつたし、数十メートル先にはストリップ劇場が昼間から呼びこみの声をあげていた。僕はそんな環境の中でほとんど店を手伝わなかつた。店の奥の部屋でひとりテレビを見ていた。ある日、僕がトイレにはいった時だった。旧式の便所で足元に小さな掃き出し窓のついてるものだった。しゃがみこんだ足元の窓がそつと開いてチリ紙の束がさしこまれた。父の手だった。便所のチリ紙がほとんどなくなっているのを心配した父が、外へまわって無言でチリ紙をさし入れてくれたのだった。

父は七十八歳で死んでいったが、その一年前までラーメン屋をやっていたのだった。

父が死んだ時、僕は二十五歳だった。それからもう四十年が過ぎたのだった。父の（そして母も父の死後半年で死んだのだが）三十三回忌も終え、五十回忌まであと何年だろうと考えたりする。そんな折、お盆の墓まいりにきた姉がこんなことを言った。

「ハルオはいくつまで生きられるかなあ、ってお父ちゃん、よく言っていたよ」

それは僕が最近体調を崩して医者にかかったという話のあと出てきた話であつた。小さい頃、確かに僕はやせていて、ひよろひよろして、元氣のない子供だった。おまけに小さい頃から足が少し悪かつた。僕は、ああ、そうなのか、と思つた。と同時に、父はそんなことまで心配していたのかと、なぜかひどく戸惑つてしまった。

姉とはよく喧嘩をしていた父だったが、僕に対しては父は死ぬまで遠慮がちだった。

老い先短い父が息子の生き死にを心配する。それは広津和郎の父が良くなりかけた結核をぶりかえしてしまふほどの心労なのだ。そしてそれは、父というものの奥深くに沈んでいるやりきれない哀しみのようなものの仕業なのかも知れないと、四十年前、五十年前の父との日々を、あらためて僕は思いおこすのだった。